

令和5年度 第2回富士市総合教育会議		会 議 録	
開催日 令和5年12月20日 水曜日 開 会 15時00分 閉 会 16時18分		会議場 消防防災庁舎 3階 研修室	
出席者の氏名			
市 長	小長井 義 正	教育委員 (教育長職務代理者)	和久田 惠 子
教 育 長	森 田 嘉 幸	教 育 委 員	篠 原 均
		教 育 委 員	松 田 靖 子
出席職員等 (事務局) の氏名			
教育次長	江 村 輝 彦	教育総務課指導主事	瀧 南
教育総務課長	味 岡 俊 雄	学校教育課指導主事	五十嵐 陽 子
学校教育課長	齋 藤 文 徳	教育総務課参事補兼指導主事	吉 村 直 也
学務課長	村 嶋 博	教育総務課調整主幹	小長谷 聡
社会教育課長	吉 田 和 洋	教育総務課指導主事	山 田 英 雄
文化財課長	久保田 伸 彦	教育総務課主幹	遠 藤 綱 輝
中央図書館長	大 川 英 子		
富士市立高校事務長	榎 俊 英		
教育研修・特別支援教育センター所長	檜 木 小重美		
青少年相談センター所長	川 口 壽 彦		傍聴人4名
博物館長	植 松 良 夫		
議題 (動議) 及び議事の概要 (議 案)			
議第2号 令和6年度から全校実施となる小中一貫教育とコミュニティ・スクールの 推進について			

開会

教育次長

(開会)

市長あいさつ

市長

皆さんこんにちは。教育委員の皆様におかれましては、年末の大変お忙しい中、教育委員会会議の終了後ということでお疲れの中でございますけれども、総合教育会議にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。今回の議題は、令和6年度から全校実施となる小中一貫教育とコミュニティ・スクールの推進についてであります。

教育委員会では、平成30年3月に「富士市小中連携・一貫教育基本方針」を策定し、令和6年4月からの小中一貫教育の全校完全実施に向け、段階的に準備を進めていただいております。

また、小中一貫教育を推進していくためには、保護者や地域住民の声を丁寧に聴き、共に学校づくりを行うという姿勢が大切であり、地域が一体となって子供たちを育む「地域とともにある学校づくり」への転換が重要です。

このため、地域の思いを学校づくりに生かしていく学校運営協議会が、来年度には全ての小中学校に設置され、市内全校がコミュニティ・スクールとなると伺っております。

本日は、来年度、本格実施となる小中一貫教育とコミュニティ・スクールについて、これまでの取組を再確認し、それを踏まえた上で、今後、期待する成果などを委員の皆様と意見交換させていただきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

私からは以上です。

教育次長

ありがとうございました。本日のテーマは、令和6年度から全校実施となる小中一貫教育とコミュニティ・スクールの推進についてであります。

それでは、これから議事に移りたいと思います。議事の進行につきましては、この会議の主宰者であります小長井市長にお願いします。

市長、よろしくをお願いします。

議事

議第2号「令和6年度から全校実施となる小中一貫教育とコミュニティ・スクールの推進について」

市長

それでは、ここからは私が進行役を務めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

では、早速議事に移りたいと思います。議題の資料を見させていただきますと、令和6年度から全校実施となる小中一貫教育とコミュニティ・スクールの推進についてであ

では、進め方は基本的に「これはたてであろう」というものであればたてでいいわけですし、若干そこが複合した形での意見、質問であってもよろしいかと思いたすので、それで進めていきたいと思いたす。

それではまず、「たての接続」ということていわけゆる9年間をつなぐということに閣して、ご意見、ご質問等あればお伺いたしたいと思いたす。

松田委員

私もこの資料を、たてとよこと自分の中でイメージしながら読みました。たてというところ、子供が生まれてから大人になるまでのすごく重要な部分を担う、この教育界のところで、新しい一貫教育で組み込んでいくのかということて、この資料が作られたのかと思いたす。発達段階ということて、こう分けられたのかと思いたす見させていたてきました。

この資料を読んで、最初に思いたすのは、小学校に入るまでの過程で、やはりここに行くまでの幼児教育の中で、受け止める力とか、気付く力とか、興味を持つ力とか、そのような基礎をしっかりと連携することが大事だと思いたす。そこがあるからこそ、義務教育の小中一貫につながっていくのではないかと思いたす。

今、色々な問題が学校、教育界にあると思いたすので、そこの連携がしっかりと取れていないと、いい計画であっててもなかなか子供にフィットしていくことが難くなるかもしれないというて感想です。とてもいいものだと思いたす。縦軸の連携というところて、小・中の連携はあるのですが、幼稚園のところ、若しくは保育園のところ、3歳までのところ、子供一人に例えた時に、その連携はどういう形で今後考えているのか、あるのかないのかということて疑問に思いたす。

あくまでも今日は、小中ということてですが、そこは切り離してはいけないのではないかと思いたす。連携をどう考えているのか、中1ギャップだと同じだと思いたすて、そもそも幼児教育からのギャップも埋めないと中1ギャップも埋められないのではないかと思いたす。

この「たての接続」のところで少し、個別の管理ではないのですが、お子さんの成長過程の連携をどう考えているか、小学校から中学校に上がる時に、一貫すれば連携が取れると書かれていたのですが、じゃあもつと前からの連携はどのように取られるシステムになっているかということて質問て聞きたいなと思いたす。個別て、システム化されているのでしょうか。

市長

今、2つありました。入学前の幼稚園、保育園からの接続というてをどういうふうて考えるかということて、あともう一つは小学校に上がる前からの個別の情報についてですね。

松田委員

そうですね、小学校、中学校に上がる時に、たとえば一人に個別票があつて、そ

ういったものをシステム的に取っていくのかどうか。そういったものを、小中一貫で実際にやっていくのかということです。

学校教育課長

今ご指摘していただいたことは、すごく大事なことだと思っています。私たちは今小中一貫教育ということで、話はしているのですが、その前の園小接続というところが重要と考えており、令和5年度は園小接続について、研究をする必要があるだろうということで、富士川第一小学校と富士川第一幼稚園、保育園ということで、小学校に入る前からどのような接続がいいのか研究をしているところです。来年もそれを継続していこうと、その研究をもとに今後市内で園小接続をどういうふうに進めていくのかというのを考えていくということになっています。そこでもスタートカリキュラムとか、アプローチカリキュラムというものを作って、どんなものを意識してやっていったらいいかということをして今やっているところです。

データとか情報をどのように引き継いでいくかについては、これはちょっと難しいところがあります。学校によっては、一つの小学校に、私立の幼稚園保育園を含めるといろんな園から子供たちが集まってくるので、情報を一人一人丁寧に引き継ぐというところまでは正直、確立しておりません。保護者とか園の都合とかもありまして、その辺のところも含めて、これからどんなふうに情報を引き継ぎながら、子供たちに支援していくかということはまだまだ研究が必要だと考えております。

和久田委員

小中一貫教育については、6、7年前に姫路の白鷺小中学校に見学に行かせていただいて、その頃からすごく勉強させていただいた記憶があります。その時から非常に思っていて、今回も松野学園ができた時に思ったのですけれども、中1ギャップとか、9年間を連携にというときになってくるとやはり、どうしても施設一体型と一体型でない場合とではすごく差が出てくる気がします。

中1ギャップと呼ばれるのは、特に環境で大人数になったり、学校が大きくなったり、部活動が出てきたりとかというところで、やっぱり6年間終わって中学校という学校という校舎に入ったときに、違和感というか今までとは違う社会ができ上がっている中に入っていき、そこをどうやって一貫教育をする中で、施設を別々の場合には滑らかにもっていくような形をとっていくのか、というところを、もし何かあるのであれば教えていただきたいと思います。

教育総務課長

まず、施設につきましては、改築はなかなか簡単にできるものではないので、できる限りぎりぎりまで既存の校舎を活用して、その後できれば施設一体型小中一貫教育に対応できるようにしていく形となります。1小1中のときにはそれほど影響はないと思うのですが、2小1中、3小1中の場合にはそれぞれ文化がありますので、子供観といいますか、子供像を統一する、こういった子供にしていきたいという像を共有して色々な所で交流授業や、そういったことをしながら、同じような方向で育てていくということで対応しております。

しばらくの間はほとんど分離型でやっていかなければならないことは間違いないわけですから、考え方といたしますか、目指すところを一本化していこうと、そんな形でやっております。

教育次長

補足させてください。今日お配りした松野学園の小中一貫教育ビジョンについて、松野学園は施設一体型ですが、施設分離型もこの小中一貫教育ビジョンを作っております。各中学校区の中で、その1小1中、2小1中であつたり、3小1中だつたり、その中で共有する、先ほど教育総務課長が子供観を統一というのはそういうことで、これを作って、小中学校が全く同じ方向でやっていく、まずそれが一つです。物理的に施設一体型がスムーズにいくのはよく分かっているのですが、現状なかなか難しいので、分離型でいかに効果的にしていくかというところが、大きな課題です。

また、教育委員会会議の中でも人事異動の話の中で、例えば小学校の先生を同じ校区の中学校に異動させることや、中学校の先生を小学校に異動させて、持てる教科を担当してもらうなどのこともしております。

その他にも乗り入れ授業や小学校同士の交流ですとか、いろんな方法で施設が一体でないところの部分を補っていく、当面はそんなことかなと思っています。

和久田委員

当然施設を一体化するのは当面無理だろうというのはよく分かっているので、ただその中で小中一貫を富士市内全部やりましたよというときに、子供たちがどうやって実感するのかなというところが、すごく大きな課題だと思っています。子供たちもそうですし、保護者もそうだと思うのですけれども、先ほど言ったように乗り入れ授業というのは、前からも少しやったりしていましたが、PTAなどでは3校合同事業といって、保護者同士が他の地域の方々や中学校の保護者と一緒になって活動することも今までもやってきているのですね。それなので「さあ、小中一貫ですよ。」と言われたときに、「小中一貫で何が変わったの？」となってしまうと、もったいないなと思っています。そこをもっと実感できるようなものをしっかりと生徒たちにも保護者たちにもあるといいと思います。

「こういう教育方針です！」というのは、私たちには分かるのですが子供たちが実感できるかというとなかなかできないので、子供目線で考えたときに「これが小中一貫だ」というのが果たして分かるのかなというところを、埋めていく方法というのをもう少し検討の余地があるのではないかと考えております。

学校教育課長

ありがとうございます。実際、小中一貫教育を実感するってどんな形で、例えばよく言われるのが不登校の数が減ったとか、あるいは子供の姿がこうなったとか、学力が非常に高くなったとか、そういった数字的なもので実感するにはもう少し時間がかかると思っています。ただ、私達教員は、ここ数年の中でも私たち自身が実感しているところは、やはり数年前までは同じ教員であっても小学校の先生と中学校の先生は同じ教員であっても違うんですね。子供たちへの見取り方、関わり方とかも小学校、

中学校は違います。だから例えば巣立った子供たちがちょっと荒れてきたりすると、「あんな子供たちが何であんなふうになっちゃったんだ。」と中学校文化を否定したり、逆に中学校は、「小学校で何を教えてきたんだ。」と言ってみたり、そういったところが何年か前はありました。それが、小中一貫教育を進めることによって、お互いにどんなことをやっているのか、どんな思いでやっているのかをすり合わせることによって、先生方が小学校、中学校を理解するようになってきています。それは実感です。こういうものの見方が、結局は目の前の子供たちの関わり方に表れてくることありまして、今まさに中学校区の中でこんな子を育てたいというところが小学校、中学校で同じ方向で進めることになることで、一人の子供に関わる関わり方がある程度一本化されてきているので、今それが滑らかになりつつあるのかなと思います。実感するまでもう少し時間はかかると思いますが、少なくとも教員の中では、そういうような小学校、中学校への互いの理解が進んでいるという所であります。

和久田委員

ありがとうございます。先生方の実感はとてもよく分かります。子供たちが小学校から中学校に行くと、社会的なギャップがあるのが例えば規則が全然違ったりとか制服があったりとか、小中が違う感じがあるのですが、それはそのまま行くわけですよ。それを考えると、何かその一貫になったというのが先生たち以上に子供たちが感じられるというのが、難しいところですけども、なかなか持てないだろうと感じているので、先生方が行き来するのは当然のことながら大事で、教科担任制を小学校でもやってみるといのはとても大事なことなのですけれども、そんな地道な段階を少しずつ踏みながら子供たちには分かってもらえないですよ。

教育長

私の方から、子供たちがそれを実感するという事は、子供たちのモチベーションが上がっていくことにつながると思います。今言えることは、小中一貫になってここが変わったとの実感の前に、まずはワンステップ目として違和感が無くなることあると思います。今までは小中の中で違和感が大きくあったのです。まさに、約束事、決まり事が小学校と中学校では違っていて、小学校で許されたことが中学校では急に厳しくなったとか、授業でも、小学校では体を向けて聴いている学校もあれば、中学校で一緒になると学校によってみんな授業の受け方が違う、そこで集まったときに「いいです。」「分かりました。」と反応がある学校もあれば、黙っている学校もある。子供間の中でも、他の子供たちと一緒に生活することに違和感がありました。

それから、職員室への入り方などの生活の決まりの違和感。学び方の違和感。今まだ現にそういった学校もありますけれども、小学校同士で指導の仕方をまずはそろえて、中学校でも指導にギャップがないようにしていこうというところは、既に進んでいて、そういうと子供たちの中でまずは一貫だという実感よりも、今まで感じていた、自分が感じることはないと思うので、前の方が感じていた小学校と中学校の溝にある違和感が取り除けることは大きな進展、ワンステップ目になっているのかなというふ

うに思っています。

その後、指導の一体化によって目に見えない成果という、体で感じる成果と目で可視化できる成果がないにしても、じわじわとこうした色んな子供たちの学びから得られるもので実感というのは見えてくるのかなと期待しています。

和久田委員

ありがとうございます。先生方がまずそれを実感するのが第一なので、それはとてもよくやっていただいているのではないかと感じました。4・3・2でいくのであれば、そのつなぎの3のところがどういうふうに子供たちに理解してもらいながらつなげていくのか、というところがとても重要なポイントになってくるのではないかと考えております。その辺をよく先生方同士でも、あるいは子供たちも含めていい方向にもっていったらいいなと思います。

市長

今の実感という部分で、どちらかという学びの点での話が多かったと思いますが、実際子どもたちが実感するというのは、小学校と中学校が合同で何かやるとか、全体での行事とか、一緒に学び合う場ですよね。

具体的に実感できる場としてどのようなことが考えられているのですか。

学校教育課長

具体的にはいくつかありますが、例えば一番分かりやすいところでいうと、富士川第一小学校と富士川第一中学校が合同の運動会を行いました。あるいは生徒会と児童会が交流しながら同じ何かを行っています。例えば挨拶運動を地域展開できないかという話をしたり、中学校に上がる前に小学校の子供たちが授業参観に行って、中学校の授業がどんなものであるか、あるいはそのままどんな部活動があるか見学をしたり、そのようなことはどの学校でもやられていることになります。

実際に施設一体型であればもっと頻繁にできることでありますが、分離型であると回数に限りはあるのですけれども、今のところはそのような形になっています。あとは地域清掃なんかを一緒にやったりするところもあると思います。

教育総務課指導主事

委員会活動等でも、小学生が中学生に GIGA タブレットを通じてオンラインで相談をしたりしています。例えば放送委員会とかで、今度の企画、こういうことを考えているよとか、お互いに情報交換をしたり、先輩に相談したりということで、オンライン等も使いながら進めているところです。

市長

施設一体型でない場合はなかなかメリットとして享受できない場合は、今言ったようなオンラインとか、こういった方法で同じような形で小中一貫を実感できるようにしてもらいたいですね。あとは具体的に小中学生が集まるような、具体的なことがも

う少し増えていくといいのかなと思います。それはオンラインも含めてぜひ検討していただきたいと思います。

篠原委員

これを読ませていただいて、今までは教科書があって、1年生はこれ、2年生はこれ、小学校ではここまで勉強してというのがあって、中学生になったら中学の勉強というふうに分かれている。ここを流動的に9年間で学べればいいというふうなイメージで読んだのですが、そのときにネックになるというか、教科書はどうなるのかということです。変わってないのであれば何も変わらないのではないかと、そうすると教科書は変わらないけれど、教える指導方法を変えて柔軟にするのか、例えば5年生になっても5年生のことが分かっていたら6年生のこともやってもいいのではないかと、逆の頭のいい子は本当にどんどん先に行ってしまうわけですね、先に行ってもいいのかとかそこまで柔軟にできるのかどうか、中途半端な柔軟なことをやると返って混乱するのではないかと、という部分があるので。

子供たちの人間関係とか、そういうところはすごくいいなと思いますが、学力的に教科書を前と同じように使っていくわけだから、そんなに変わらないのではないのかというイメージがありますが、教科書自体を変えてしまうというのはあるのですか。

教育総務課参事補兼指導主事

平成30年度に教育委員会が発行したリーフレットの裏面にQ&Aが書かれています。小中一貫教育を進めるに当たって、保護者の方からの疑問等を答えるに当たってこちらの方を作っております。「転校する際、学習内容の違いで困りませんか。」とあります。今篠原委員のご指摘の通り、小中一貫教育を進めていくと、義務教育学校もそうですが、やる内容を次年度に遅らせて、又は教員がこの教科のこの単元は手厚くやりたいことに時間をかけるということ、逆に先取りしてやるということも可能ではあります。けれども、今度他市町へ転校する際にここは習っていないということは未修学のまま送られてしまうということが考えられますので、富士市では先取り、又は遅らせてという形は採っておりません。まず、学年の配当の時間で学ぶべきことはその学年の中で学んで次の学年に進むという形にしております。

篠原委員

そうすると小中一貫の意味が薄れてしまうような、型にはまったものを流動的にしよう、9年間の中でやればいいというのが小中一貫のような気がしているのですけれども、学力的には今と変わらないということですね。

学校教育課長

各学年にどの内容を学習するかということは学習指導要領に定められておりまして、それを大きく変えることはできません。それに準じて全ての教科書がこの学年ではこの部分をやるなどと組まれているので、それを小中一貫だから上の学年のところをやるというのはできません。これはどこの市町でも同じです。

では、小中一貫で何が違うかといいますと、先ほどから話に出ております教員の研修であったり、異動であったり、その行き来が盛んになってくると、中学校の社会の教員が小学校の社会の授業を見に行く回数が増えます。実は社会科については、基本的には小学校の時のものと、同じものを中学校ではやるのです。簡単なものを小学校でやるのだけれども、それをさらに深めたのは中学校です。行き来が増えていくと、小学校で、こういう教え方をしてこのレベルまでたどり着いているということが分かった上で、中学校なりのアレンジを加えながらプラスアルファを作ることができます。それが一貫教育でないと、小学校でやっている内容をただ単に同じものを伝えようとして子供たちがつまらなくなってしまうたり、物足りなさを感じたりすることがあります。そういう意味で授業の内容を中学の先生が知った上での学びにつなげるということはプラスになっているかなと思っています。進度的に大きく変えることは、学習指導要領もあるのでできないと考えています。

篠原委員

何かもっと自由化されていくのかなと思っていたけれど、指導方法が変わるということですね。

ちょっと私のイメージと違って、飛び級のようなものがあつたらおもしろいなと思ったのですが、確かにそれに対応するのは大変ですからね。

市長

まずは、中1ギャップというところが解消されているということ、先ほど教師間の意識がこれまで大分違っていたのが、一体化する、それはとても大きなことだと思います。9年間で学ぶことは変わらないわけです。決して早めるわけでもないですし、それによってついていけないお子さんがいても困るわけですから、その考え方は変わらない。だけど小中一貫教育が行われることで、かなりきめ細かく指導していただくことになるのかなと思います。そんなところでよろしいでしょうか。

今、「たての接続」の話だけをしています。これで一旦たての話は終わりにして、次に「よこの連携」の話をしていきたいと思っています。それでまた改めて総合的にご意見、ご質問いただければと思います。

資料には成果や課題等出ておりますので、これを見ながら「よこの連携」についてご意見があればお願いします。

松田委員

「よこの連携」ということで、「よこ」ってこうなのかなという解釈からの質問です。たては子供の育ちで、よこは人と人のつながりというところで、たてでももちろん小中学校で人数が多くなる、関わる人が増えていく、学んだことを使うステージが地域という人々によって学びを完結させていくというところにはすごくいいことだと思いました。ただ一つ、小中一貫教育やコミュニティ・スクールということが市民の中で浸透していけているかどうか、すごくいいものをみんながやっぱりそうだねといった形で進めていくということがすごく大事ではないかと思っています。

例えば先ほどのリーフレットがありましたが、これは平成 30 年に作られている中で、せっかく令和 6 年 4 月から全校実施であれば新しいものに刷新して、GIGA スクールのことであるとか、やはりメッセージを市民の方にこういう教育でこの富士市は子供たちを育てていくのだというところがやはり浸透させていくための策があるといいと思います。難しいことだとは思いますが、新しいことの取組は、皆さんを巻き込むメッセージということがすごく大事だと思います。やっぱり子供を支えていくステージを作るのは周りの大人なので、そこの方への浸透をどうすればいいのかというのは考えながら資料を見させていただきました。

4 月に向けて何か作られているのですか。

教育次長

小中一貫教育には、たてとよこがあるのですが、具体的には今、地域の方向けの小中一貫のリーフレットを作っているところです。紙ですからどこまで浸透するかということがありますが、来年 4 月に配布、回覧をする予定です。

また、今実際各町内会の回覧板で各学校の C S 便りというものを月 1 回程度で回覧しています。

ここで出てくるような地域活動をされている地域住民の方々はかなりご理解いただけていると思いますけれど、25 万市民の中で地区活動にどれだけ興味をもったり、アンテナを立てていただいたりしているのかとそこのベースもあります。しかし、そういった中でコミュニティ・スクールは学校運営をより幅のあるものにしていくために、地域住民の力を借りて行っています。一方、地域学校協働活動という考え方もございまして、地域活動を進めていくのに、高齢化している中で、子供たちをうまく巻き込んで地域活動を拡充させていこうということで、国全体として大きな 2 つがあるのですね。ところが富士市の場合はまちづくり協議会がかなり他市と比べても充実していて、生涯学習などでずっとやってきたものですから、その流れの中で、敢えて地域学校協働活動をやりましょうと言われても、いやいや富士市はやっているから今更というところがあって、そちらの方の動きは若干鈍い状況です。

その中で、地域の方にとっても、地域活動を充実させていくために、いかに子供たちを巻き込んでやるかということで、先般 12 月の地域防災訓練でも、結構子供たちが行っていると思います。様々な防災の取組や、コロナが明けましたから、色々な行事もこれから増えていくと思います。いかに子供たちを巻き込んでやっていくか、そこで逆の方でコミュニティ・スクールに当たって地域の方たちも連携していただいて、情報発信を色々な場面で行いたいと考えています。特に富士市においては、地域のまちづくり協議会の皆さんをうまく巻き込んで、学校運営協議会には一部まちづくり協議会の代表者の方とかに来ていただき運営しているのですが、それがなかなか地域にフィードバックされていないというそんな課題も見えてきましたので、それについては今後考えていきたいなと思っています。

学校教育課長

コミュニティ・スクールについては、段階的に富士市では進めてきています。平成27年から始まって、その時には市内でも1校とか、2校とかでした。それが徐々に増えてきて、来年やっと全校で開始ということになるので、統一したものを市全体に出せるのは来年からだと思っております。そのような動きの中で各学校がコミュニティ・スクールとしてスタートするということは、今教育次長がおっしゃったように学校だよりを地域の回覧板を通じて地域の方に読んでいただくことを通じて、来年には一斉に地域に広まっていくということがあります。段階的にやっているところですので、正直今年度始めた学校では実際、「何をやればいい？」とまだそんなところでスタートしている学校もあります。でも、5年前からやっているところは、ある程度進んでいるという学校もあります。スピード感がありますので、そういった意味で来年度全ての学校で始まるということをお願いと捉えて、またそれぞれの学校でも発信をしていけるようにしていきたいと思っております。

和久田委員

コミュニティ・スクールについての図の中に、学校・地域・保護者というのが連携と書いてあって、当然協議会の中にPTAの方々も入っていると思うのですがけれども、先ほどお話があったように、PTAの活動の内容を知っているのはほんの一部の方々と、一般の保護者の方々はほぼ知らないのですよね。特に若い保護者の方々は地域というところにもほぼ入ってらっしゃらない。そこをどういうふうに連携に入れていくのかということを考えていかなくてはいけないと思っております。CSディレクターはすごく大変だと思っておりますが、そういう提案なんかを入れながら巻き込んでいくということを取っていかないといけないと思っております。保護者は一番大事なのではないかなと思うので、ここの巻き込み方をうまくやってほしいです。

地域も、このごろだんだん衰退してって言い方をしているか分からないのですが、地域の運動会や行事がだんだんとなくなっていっているのですよね。若い方が参加してくれないので、とうとう地域の運動会が無くなりましたとか、地域の夏祭りが夜やらなくなりましたとか、そんなことがどんどん出てきている中で、そこに子供を絡めていくというのがなかなか難しくなってきたときに、学校の行事では学校の運動会がありますよ、そこに保護者は来ていますよ、もっとそこを地域と絡めることはできないかなとか、学校側がもう少し門戸を開いていかなければいけないのかなとか、というようにちょっと感じています。合同で、子供たちを同じ地域の中で育てていくという中では、双方が開いてやっていかなければならないと思っております。

小学生の頃のことをふと思い出したのですがけれども、私の通っていた小学校では運動会が1日で終わらないくらいだったんですね。なぜかという、その当時の近くにあった大きな製紙会社の方が入って一緒にやっていたのですよね。そこに保護者の方がいて、その方たちも一緒に運動会をやっていたので、夕方までに終わらないというくらいのプログラムだったんです。2日間かけて運動会をやっていました。そのため、

子供たちは地域の方たちをよく知っていました。今はそんなことはできないと思いますが、何か保護者を絡めていく方法をもう少し強化していく必要があるのかなと思います。先ほど言ったとおり、段階的にやってきた中で、最初のモデル校としてコミュニティ・スクールをやられていたところから、課題が出てきていて、それを共有していると思うのですけれども、それを一つずつぶしていったら、この課題に対してはこういうことができましたというのを全部が揃うのであれば一斉に打ち出していくことができるので、課題解決策というのは、先駆けてやってきたところが持っている、それをぜひ吸い上げて、これからやる場所には情報共有という形で投げ掛けていただきたいと思います。

市長

今、3点ほどあったと思います。1つ目はPTA・保護者をどのように巻き込むかということ、2つ目は学校側からもっと開いていったらどうかということ、3つ目はすでに取り組んでいるところの課題について今後共有して、課題解決に向けていったらどうかということでした。それについてお願いします。

学校教育課長

まず、1つ目の地域・PTAの問題ですけれども、これは正直非常に苦しいところです。何とかしなければならぬと思っています。今おっしゃったとおり保護者のPTA離れも進んできています。子供のことは気になるので、学校には行きますよと、でもPTAという動きの中で関わることは勘弁してくださいという保護者が増え出しているということは課題です。同じように、子供会にも入らない、地域の行事も出ない、でも自分で何かはしたいという方が増え出しているのです、これをどういうふうに学校、地域につなぐというのはこれからもう少し考える必要があると思います。

2番目の学校が門戸を開くということについてですけれども、学校なりに保護者とか地域のつながりが大事だということはよく分かっていますので、どんな形で保護者とつながるのか、地域とつながるのかというのは、コミュニティ・スクール全校実施のタイミングで勉強していきたいと思っています。

3番目のところとつながりますけれども、コミュニティ・スクールにはそれぞれCSディレクターを置いていて、その方を中心にコミュニティ・スクールの展開を考えています。その方々の定例会というものを年に数回設けて、各学校の課題とか、情報とかを共有しながらいい話を広めていく、その辺の話合いをしながら、地域と保護者をどうつなげていくかというのを少し考えていかなければと思います。

教育長

今まさに和久田委員がおっしゃったこと、学校教育課長が申しあげたことが現状であります。だからこそ我々はこの「たての接続」と「よこの連携」を通して、学校と地域を結びながら学校が地域の核になりながら、地域とともに地域活性にも学校が貢

献していきたいと思っっているところもあります。

まずは「たての接続」によって、学校の有機的な豊かな教育活動を計画し、小学校と中学校が連携していきたいと思っっています。一言で言ってしまえば有機的な豊かな学びということになるかと思っいます。それを、学校運営協議会によって、地域の方々に、保護者の代表、まちづくりの代表、それからいろいろなそれぞれの地域における要職、それぞれの組織でリーダーとなる方が学校運営協議会に来ていただっいますので、その中で年に3回から多くて5回、たくさんやればやっただけ浸透していくと思っのですけれども、その中で地域の方々と学校の課題や地域の課題、地域とともに学校がどういふうに地域の課題に寄り添っっていけるか、まさに学校が門戸を開いて地域の課題にもつなげていける、そうした連携をしていくことによって、これまでだんだん閉ざされてきた地域社会と学校とつながることができればと思っっています。幼小保も入れれば、高校も入れれば18年間の子供たちの生き生きとした姿の中から地域とともにそれを携えていくことによって、地域も変わってくるのではないかと、それも期待しているところではす。

最近のニュースでは、まちづくり協議会のおかげで子供の安全の見守り活動ということが吉原小学校でありました。そこには学校の経営が全く携わらないで地域のまちづくりの方々が子供たちのためにやってくださっっています。また、元吉原小学校では、だるまが有名な毘沙門天が地域にあるので、地域のだるま市を活性化していこうという地域の課題と、それと合わせて岳南鉄道の課題があって、それと子供たちの豊かな教育活動を作りたいという思いが重なることによって、地域、それから企業が活性化していくということにもつなぐるとのこともありました。

「PTA活動は必要なの？」とか、「地域と学校はどうやったらお互い活性化するの？」という中で、地域の子供会活動もだんだん沈んでいく可能性があります。その中で、このたてよこの連携を通して子供会にも入ってもらいたい、というよふな活動の中で地域と学校、そしていろんな立場の方々が一緒になって盛り上がっっていく、色々な立場の人が一緒になって盛り上げていく、それを目指したコミュニティ・スクールとの連携というふうに考えています。ですのでは、そうした中で和久田委員が今おっしやっていることを念頭に置きながら、大事にしながらか進めていきたいと考えています。

和久田委員

今抱えている課題ですね。そのために、おそらくこういうこと出ってきて、地域活性化もこれによって子供たちもいっぱいそこでかわいがってあげて、後々また地域に戻ってきてもらおう、みたいなどころも含めて、地域が活性化していきたい、と夢を描っているので、それが叶うよふな形のコミュニティ・スクールができればいいと思っいます。

篠原委員

保護者の多くの方が共働きだと思っいます。そういう方は夜か休みの日か、それくら

いしか参加できないと思うので、そういう人が参加しやすい日に設定するのがいいと思います。PTAに参加したくないから行かないのではなく、参加できない人もいると思うので、参加できる仕組みが大事だと思います。

市長

様々な会議もそうですが、活動しやすい環境づくりが大切ですね。

学校教育課長

今、おっしゃっていただいたように、PTA活動の回数や時間については見直しが行われています。今お話があったように、思いがあってもできない人が離れないようにするには何をしたらいいかというところで、PTA活動とか、回数とか、役員数を調整したりしながらPTAをどういう形で存続させるのかというところが、それぞれの学校ごと話し合いをしているところです。市P連のところでも検討されているところではあります。学校によって多少差はありますが、PTA会長がすごく精力的にPTAの在り方について検討し、上手く進めているところもあります。無理なく協力できるようなPTA活動ということは今取り組んでいるところです。

市長

これまで「たての接続」と「よこの連携」に分けて話をしてきましたが、最後総合的に見て、ご発言のある方いらっしゃいますか。

松田委員

今、時代が本当に変わってきて、コロナがあって、いろんなことが急速に進んでいます。PTAの話もありましたが、若い保護者の方であっても、子供を育てたいとか、大人にして社会に出したいという気持ちは多分私の年代とか、もっと上の年代の方とも全くそこは一緒だと思います。最近すごく思うのですが、そのメッセージであるとか、共有する言葉であるとか、会自体のやり方であるとか、そういうところをお互いに尊重し合えるような研究をして、みんなで作っていけるような手法ですかね。今までと同じではだめな時代だとすごく思っています。ですので、それぞれに研究されているとおっしゃったので、そういうところも若い保護者の方も決して考えていないわけではないと思います。手法が違う。伝わり方が違う。ご理解いただきながら双方がしっかりと同じ方向に向かえるような形を計画していただければと思います。みんなが納得して「そうなんだ」と思えるところにたどり着く、難しいことではあるがお互いを思いながら計画を立てていくことがすごく大事なことだと思います。言われたからやる、というのはなかなか子育てって、子供に教育を受けさせるところに投げってしまうところもあるので、そういうところはすごく大事にしていきたいと思います。

和久田委員

先ほどからお話に出ている小中一貫にしてもコミュニティ・スクールにしてもここでようやく足並みがそろって第一歩を全体で進んでいくという形になりますので、模索の期間というのはたくさんあると思います。それなので「これで」という決め方をせずに、流動的にこれはだめだったからこういう方法で行こうかというようにいろいろ試しながら、いい形に持っていくようにしてもらって、固定観念を持たずにやわらかい頭でやっていっていただきたいと思います。

もう1点、先ほど小学校6年間終われば終わりではないというのと同じで、富士市の子供たちは9年間終わったら終わりではないですよ。その後、高校に行って大学に行ってしまうことがあります。そうすると、その後地域を越えての活動という形になってきて、地域だけではない、そのかたまりがいっぱいあるところを斜めに突っ切っていくぐらいの勢いで子供たちは動きをしていきます。そこを見据えて、最後の2年間のところでは、その先の視野を広げていくところに向けての教育というものもすごく大事になるので、9年間でおしまいではなく、その前も、その後もつながっていくのだというのを頭に置きながら進めていっていただきたいと思います。

市長

来年4月からスタートするのですが、それぞれの中学校区で小学校の数も違いますし、それぞれの地区でまちづくり協議会をもって活動をしているのですよね。それぞれでコミュニティ・スクールをもってやっていくのですけれども、小中一貫という中ではみんな一体になっていくわけですから、それぞれの中学校区ごとに事情が違ってきますので、保護者も我々も小中一貫教育ではどの学校においても小中一貫教育のよさを享受できる、そう望みたいと思います。その辺は難しいかなと思いますが、来年の4月1日から一斉にスタートできるということですか、スタートして動き始めてやっていくということですか、どうですか。

教育総務課長

ご指摘の通りだと思います。小中一貫教育の3本の柱ということで、議論していた内容の中に中学校区の地域に根ざした特色ある教育とのことで、それぞれ中学校区で文化の違いとか、それぞれの伝統があります。ですので、そういったところを特色ある教育という形で、もちろん先行していた学校は進んでいるのですけれども、目指す児童生徒像はできているけれど、これから細かいところは固めながら進めていくという学校区もありますので、一斉で全部同じ高さになっているわけではなく、それが成長していくような形でもっていきたいと思いますので、これからもよろしくお願いします。

市長

色々活発な意見、ご質問をいただきました。まだまだ議論しきれないところもあり

ますけれど、我々も各学校、地域の取組の状況なども見ながら、今後小中一貫教育、コミュニティ・スクールがどのようにスタートし、育てていくのか継続して見ていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。今日は本当にありがとうございました。

閉会

教育次長

ありがとうございました。まさに今、市長がまとめてくださったように、まずは4月から小中一貫教育、コミュニティ・スクールが全面的にスタートでございますが、まだスタートでしかないものですから、進捗管理をしながらよりいいものにしていきたいと思っております。

それでは、以上を持ちまして令和5年度総合教育会議を閉会致します。本日は誠にありがとうございました。